

東北に思いをよせて!

震災ボランティア活動について

平成23年11月

目 次

序章	東日本大震災(東北震災)に思うこと	P1
第1章	私にとっての阪神・淡路大震災	P2
第2章	東北震災ボランティア活動記録	P4
第3章	ボランティア活動で出会った人たち	P6
第4章	阪神・淡路大震災との比較をとうして東北震災を考える	P9
第5章	震災による悲劇	P13
第6章	政治に思うこと	P15
第7章	ボランティアとは何か	P17
第8章	ボランティア活動参加準備について	P23
第9章	ボランティアセンターに望むこと	P27
最終章	説法臭いお話しをします	P29

序章 東日本大震災に思うこと

平成23年3月11日発生しました東日本大震災により犠牲となられました方々及びご遺族の皆様には謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災されました方々には心よりお見舞い申し上げます。

今回、23年9月に震災ボランティアを実行したことをきっかけに、色々な思いを込めてレポートを作成することにしました。私なりに震災に対する考察をしてみます。また私の阪神・淡路大震災の経験を踏まえて、ボランティアに対する考え方、ボランティアの実施方法等を整理してみます。

レポートは震災発生から半年を過ぎ、ある意味、震災に対する支援がおざなりとなること、現地での受け入れ体制等が惰性に流されることや驕りに対する戒めの警鐘とも考えます。また、内容は各種資料を精査したものでなく、私の主観が多く盛り込まれていると思います。そんなことは知っている!とお叱りなく、今一度、確認の意味でお読み頂ければ幸甚です。

このレポートをお読み頂いて、ボランティア活動が活発になり、少しでも復興にお役に立ててれば幸いです。

第1章 私にとっての阪神・淡路大震災

平成7年1月17日早朝、淡路島の北淡町(現淡路市)を震源とする阪神・淡路大震災が発生しました。

当時、私は震源地に一番近い病院、国立明石病院岩屋分院に勤務していました。

自宅(神戸市西区)で地震を確認し、明るくなるのを待って病院へ向かいました。

明石港では浮き桟橋は沈没、岸壁より高速船にて淡路島へ、古い家並みは崩壊していました。病院は被害を受けるものの診療体制を確保でき、被害者の受入・診療を行っていました。

続々と非番の職員も駆けつけ、来院する患者さんの対応におわれつつ、ライフラインの確保等に努めました。

そのうち地震の情報が把握できるようになり、国立明石病院、国立神戸病院からスタッフの派遣、物資の提供を受けて、当日中には病院は落ち着きました。

翌日以降は、上部官庁、他の国立病院の支援を受けて、診療機能の維持とライフラインの確保を行いませんでした。

職員や家族に亡くなった者は居なかったものの、家屋の倒壊等により生活確保のために職務を休まざるを得ない職員も居り、応援者の協力により診療体制を確保しつつ、職員の被災支援を行いませんでした。

当時、私は総務事務をしており、施設長、事務責任者の補佐をしつつ、受入応援者の住居等の確保と被災職員の把握・生活支援を行いませんでした。

ただ、震源地に一番近い病院でありながら被害に遭いつつも診療に支障なく、負傷者の収容・治療も比較的スムーズに行えたこともあり、ある意味、余力があったと言えます。

地震発生から一週間は病院に寝泊りをし、夜になると対岸の神戸市街地が赤く、何ともいえない惨状を窺わず光景に胸を締めつけられました。

余力がありながら、応援をもらう立場では自らが被災者の支援のため、病院を離れることができず、このことが私にとって消すに消せない悔いとなって、心に残っています。

震災も一段落し、被災者が仮設住宅から恒久住宅に引越すようになりました。

雑誌で引越しのボランティアをしていると知り、このボランティアに参加しました。

土曜、日曜と休みを利用し、時としてはトラックの運転もしました。

自分の子供を連れてのボランティアの日もありました。

災害ボランティアのNPOにも参加しましたが、本部が関東ということもあり、具体的な活動の実績は残せていません。

阪神・淡路大震災の起こった平成7年をボランティア元年と呼びます。

以降、中越大震災、北海道南西沖地震、ロシア船籍重油タンカー「ナホトカ」座礁と活動の機会はあるものの、大した実績が残せていません。

今回の東日本大震災による宮城県南三陸町、山元町へのボランティア活動により、過去の悔いを少しでも埋めることができたのかと思います。

東北は今から雪の季節となります。

雪が溶けたのなら、東北の地に再々度わが足を立て、わが思いの一部を届けたいと思っています。

第2章 東北震災ボランティア活動記録

3月11日の震災は入院中の病室で知りました。

阪神淡路大震災を知る私にとって、触れたくないものでした。

新聞、テレビでの報道により、その被害の甚大さを知るにつれ、活動ができないわが身が疎ましく、もやもやとした気持ちを持たざるを得ませんでした。

天皇、皇后陛下が被災地で目礼し、避難所では膝を折りお見舞いをされる姿を見ると両陛下に対する感謝の涙、犠牲者に対する鎮魂の涙、自分の身体に対する歯がゆい涙... が止め処なく溢れてしまいました。

術後半年の検査等を重ねてやっと、主治医の了解を頂くことができました。

平成23年9月21日 提供物資を積み込み、一路東北、宮城県南三陸町へ、台風15号による足止めに遭い、結局、22日夜の宮城入りとなってしまいました。

翌23日と24日は南三陸町で土砂の分別整理作業を行いました。

2人の仲間を得て、かつ神戸の皆さんのご支援を受けてワンボックス車いっぱいの物資の提供も行うこともできました。

お彼岸に併せて花木農家から菊を、病院、薬剤師会、衛生材料会社からはマスクを、県会議員、元市議員の後援会、元プロ野球選手等からいろいろな物資の提供とそのお気持ちを東北の地に届けることができました。

南三陸町は旧志津川町と旧歌津町が合併しています。

そして、町役場は旧志津川町に有ります。

この町役場は海に近く、津波を直に受けて鉄筋の建物は残るものの、その中は瓦礫化していました。そして、町内の鉄筋3階建の上には乗用車が乗っかっている惨状を目の当たりにしました。

ボランティアセンターは丘の上にある体育施設の敷地に設置され、周辺に関連のプレハブが建てられています。体育館はかつては避難所として使用されていたのでしょうか。

町内の小学校、中学校は高台にあり、生徒たちの犠牲はなかったようです。

このような惨状からの復興は進んでいるも、震災後半年を経過しても再建の槌音は聞こえていません。

9月の支援を終えて、東北は冬の、雪の季節が近づいています。

帰神後、雪が降るまでにもう一度、東北への気持ちが抑えられません。

被災地では被害の程度や復興の進捗状況により、ボランティアの受入を制限、調整するなかで、やはり宮城県の山元町を選択しました。

10月26日 仕事を終えて、職場の仲間と二人で名神、北陸、磐越、東北道と順調に進み、27日早朝 現地到着、29日までの活動は始まります。

27日 イチゴ農家で苗の手入れ 28日 個人のお宅でリフォーム前の手入れ、

29日 津波被害に手付かずの個人宅での瓦礫とヘドロの搬出と壁のはつり作業を行ないました。

どのお宅も以前の震災以前の生活に戻るのにはまだまだ時間が掛かりそうです。

山元町は旧坂元町と旧山下町が合併しています。

海岸に近い地域は平野であり、町役場は海岸から離れた高台に有ります。

そして、ボランティアセンターは町役場敷地に設置されています。

町役場は津波の被害はなく、ただ、地震により庁舎は使用不可となり、仮設により業務を行っています。

海岸に近い地域は津波により、多くの家が被災し、鉄道は線路、駅舎が使用不可となっています。線路には草が生い茂り、架線は垂れ下がっています。

南三陸町と同様にまだまだ再建の槌音は聞こえて来ません。

山元町にはネットで必要物資の確認を行い、母校（小学校、高校）同窓会の協力の下、土嚢袋、コピー機等の物資提供が行えました。

私のボランティア活動は自己満足かも知れませんが、できるだけ多くの被災された方々の少しでもお力になればと思います。

神戸からでは再三の東北支援はままなりません。

私の支援は点でしかありません。点の活動しかできません。

ボランティアセンター、市町村には被災者の考え、市町村の方向性や復興の進捗状況、この状況からここまで復興しました、さらに次はこう考えています.... もっと広報して下さい。

復興の方針と被災→復興の線が見たいと思います。

きっと多くのボランティアが立ち上がるでしょう。

そして、復興はさらに加速を増し、一日でも早く以前の生活に戻れるでしょう。

宮城県の、東北の、そして日本の復興を願っています。

第3章 ボランティア活動で出会った人たち

ボランティア活動にはいろいろな人が参加しています。

9月、10月の活動で出会った人たちをご紹介します。

○在日3世のK君

南三陸町でボランティアセンターのスタッフとして、復興作業の現場指揮をとっています。

25、26歳くらいでしょうか。

しっかりと現場で作業をリードしています。

きっと、南三陸町が大好きなのでしょう。

○八王子市のMさん

週末に活動するうちにボランティアセンタースタッフに取り込まれたと言っていました。

私と同じ歳、同じ血液型、同じような体型をしており親近感を覚えました。

○エリートサラリーマンのTさん

大分県出身、関西の有名私大卒で某有名広告代理店に勤めています。

東京から休みを利用してボランティアに参加しています。

テント泊で風貌からはとてもエリートサラリーマンには思えません。

○息子さん家族とともに活動に参加された老夫婦

私は南三陸町に甥を帯同しています。

お昼の休みに甥にお茶を提供して頂き、いろいろなお話を聞かせてくれました。

息子さん夫婦、お孫さんとともに復興ボランティア活動に参加されています。

○仕切りたがるボランティア

東京ナンバーの車で参加していました。

仕事では管理職なのかも知れませんが、ボランティアを明らかにするビブス（スポーツで紅白戦をする際にチーム別を認識するのに着用するベスト）を脱いで、他のボランティアとは違うのだと言わんとばかりでした。他のボランティアの活動を盛んに仕切っていました。

○明らかにその筋と思える集団

そろいのTシャツ（胸に「報国」のプリント）で5～6名で参加していました。

ボランティア登録時もちゃんと列に並び、活動中も黙々と作業をしていました。

人の評価は色々と有ります。でも、本当に黙々と活動をしていました。頭が下がります。

○テント泊で活動後にジョギングする中年男性

南三陸町で2日間、同じ現場で活動しました。

ひげを蓄えていて、一見サラリーマンには見えません。

物静かで、活動を終えてからジョギングをするタフマンです。

○震災以来、テント生活で活動するK君

自分ではニートだと言っています。

ボランティアセンターの提供するテントサイトで生活？しています。

在日3世のK君と同じくらいの年齢かな？彼女もスポットで活動に参加しています。

作業は手馴れたもので、現場では他のボランティアを的確に指示しています。

○学生かな？ J君

ニートのK君と息が合っています。学校が休みの期間に継続して活動しているようです。現場のリーダーとしてK君同様に的確に指示しています。

○徳島出身、横浜在住の奇抜ヘアーの女性

イチゴの農家で一緒に活動しました。
頭髮の一部が丸刈り程度の奇抜ヘアーでした。
街で見かければ飛んでいるしか思えませんが、心優しい女性です。

○退職後、大阪から車で来ています

63歳だったか、現役はリタイアしています。大阪から車で来て車中泊で参加しています。

○震災を職場の仙台空港で迎えた男性

津波が押し寄せた仙台空港で、避難してきた老人施設の入所者を2階に背負ったりしたそうです。自宅は特に被害なく、休みを利用して活動しているとのこと。

○退職後、農業をされていて軽トラックで参加

宮城県でも内陸部にお住まいで、被害はほとんどなかったそうです。
時間が自由になるらしく、自分の農作業の合間に活動を行っておられます。
活動にも慣れていますし、震災直後から活動されており、被災、復興状況をよくご存知でいろいろとお話を聞かせて頂きました。

○被災地で関西弁を操る外国人 ロバート・マンゴールドさん

出会えなかったですが、11月22日 読売新聞「顔」の記事です。
米海兵隊6年勤務で、岩国派遣経験のある42歳、京都在住の方です。
日本人の控えめで相手を立てる心に引かれたと来日されています。
個人での支援に障害、限界を覚え、ボランティア団体を設立し、東北支援をされています。
被災地で他人を思いやる人に出会い、その思いを深めていったのでしょうか。
手を貸そうとした老婦人に「私よりもっと困った人を助けて」と言われ、「なにいう言うてんねん」と冗談ぼく返し、手を貸した。
厳しい冬は目前。「被災者の心が折れないよう、支え続けたい」と、6回、通算3ヶ月から7度目の被災地入りを計画されています。

本当に老若男女、仕事もさまざまな人たちが活動しています。

業界のグループ、大学、ツアーリストのパックなど等の団体で参加される方もいます。

ボランティアに対する考えには各々によって温度差があります。

また、ボランティアをできる環境にも温度差があります。

自宅にいても復興ボランティアはできます。どんな形でも参加することに意義があります。

多くの人が震災に関心を持ち、自分のできることを淡々と行なって下さい。

そうすれば1日でもより早く、復興はなしえます。

外国の評価で、「日本人はこの惨状でも混乱する事無く、整然と列を成している。商店等の

略奪はない。」とされています。

でも、目立っていませんが、そういう行為は確認されています。

悲しいかな、これが人間なのかも知れません。

多くの人たちがボランティアに汗を流しています。きっと、この悲しい行為に至った人もそうせざるを得ない状況だったのでしょう。そう思いたいです。

第4章 阪神淡路大震災との比較をどうして東北震災を考える

阪神淡路大震災とこのたびの東北震災を比較してみたいと思います。

このことにより、ボランティアに対する考え方、方法等が見えてくるのではないのでしょうか？

また、国等が何をすべきかもはっきりすると思います。

○災害の形

阪神淡路第震災（以下、「阪神」という）は、直下型地震と神戸での火災により被害をもたらされました。

一方、東北震災（以下、「東北」という）は、地震、津波、原発事故による被害となっています。地震は共通では有りますが、火災⇄津波、原発事故との違いは復興、支援の方法に違いをもたらしています。

○地域性の違い

阪神は都会が多く、三次産業が占める率は大きくなっています。

これに対して東北は一次、二次産業が多くを占めています。

東北の復興はなしえていませんが、阪神での立ち直りは早かったのかと思います。

しかし、神戸の受けた被害、神戸港での貿易取扱量は以前に届くすべもありません。

津波で被災された農家では、土の改良から取り組まないといけません。

塩分を含んだものを作物の栽培に適したところまでの改良が必要であり、地下水に頼っていたものは、上水道と混ぜて塩分を希釈しています。

また、多くの漁船をなくした漁師は漁船の調達と漁港の整備が課題です。

そして、養殖漁師にとっては湾内の環境整備も復興の最大要因です。

更に水産物の加工で生計を立てていた方にとっては、漁業の復興なくしては生活の再建はありえません。

三次産業中心の阪神の場合、体力のある企業に勤める人は職を失う事無く、また職を失っても一定期間は雇用保険料が受給できました。

これに対して一次、二次産業が多い東北ではたちどころに生活の糧をなくなりす。

明日の生活にも困る方が多く居ます。

義捐金が上手く運用されたか、検証する必要は有ります。

○放射能被害

福島県では原発事故による地震の二次災害が問題となっています。

健康被害はもとより、農産物や福島、東北の物と言えば放射能…と騒ぎます。

医療機関で働く私にとっては摂取量の基準を超えているならばまだしも、基準値以内では特にこだわる必要はないと思い、考えます。

自然界にも放射能は存在しますし、レントゲン写真、CT を撮る時には被爆をします。
「レントゲン写真やCT を撮ったから体調が悪くなった。」と聞いたことはありません。
検査を行ったものについては、風評に惑わされることなく、対応して欲しいと思います。
京都五山の送り火、ある町での花火大会や成田山新勝寺の護摩行に東北の松や材料を
使う、放射能は検出されるも基準値内、健康被害はないとされるも、心ない抗議に主催者等は
中止を止む無くされた。復興を願って、犠牲者の鎮魂を目的としていたのに。
日本全体が東北に心を寄せている時になんて悲しい心しか持てないのでしょうか。
被害を我が身に置き換えても同じことが言えるのでしょうか!

○犠牲者

震災が広範囲であり、津波の被害があった東北です。
地震の被害者より津波の被害者が多く存在します。
また、行方不明者も多く存在します。
震災後、8ヶ月を経過しても警察等により捜索は地道に継続しています。
ただ、発見に至る確立はかなり減少している現状が有ります。
地震発生、津波警報により住民の避難誘導に携わった多くの公務員等が亡くなっています。
警察官、消防官、消防団員、市町村職員……
皆さん、自分の命を顧みず、その職務、責務に殉じて亡くなりました。
本当に尊い遺柱が多く有ります。
復興において、自治体の職員の役割は大切なれど、これを担う職員の多くが亡くなっています。
兵庫県でも職員の派遣を行なっていますが、短期の派遣で次々と交替しています。
長期を見据えた派遣が望まれます。

震災による直接の犠牲者ばかりではありません。
家族が亡くなった、仕事がなくなった、将来を生きていく上の財産が無くなった……
将来に向けた希望を持たず、自らの命を断つ人もいます。
この人たちも震災による犠牲者です。

○自衛官の大量動員と米軍の支援

自衛隊ではかつてない規模での動員を行ないました。
即応自衛官も招集し、その規模は十何万人となっています。
これに米軍の協力の下、ともだち作戦は災害対応の中心となりました。
前例のない日米共同作戦が遂行されたのです。
今後、あらゆる地域で、あらゆる災害に対応できる体制が立証されました。

○医療体制

現地の多くの医療機関は被害を受け、その機能は停止しました。
DMAT を中心とする医療チームが被災地入り、現地医師と共同でその対応にあたります。

阪神以降、ドクターヘリの運用は活発となり、今回の東北には多くのドクターヘリが投入され重篤な患者の搬送に役立っています。

完璧とは言えないものの、災害医療は着実に進歩しています。

○仮設住宅

東北では雪の対策を講じなければなりません。

現在、仮設住宅に風除け室、二重サッシの取り付け作業が進んでいます。

地域にも寄りますが、雪により行動が制限される場合の対応を検討しなければなりません。

食料の確保もそうです。高齢者にとって移動手段が必要となります。

また、仮に移動をしなくてもコミュニケーションの場を設定しないと孤独死を防ぐことはできません。

阪神では東北ほどの防寒対策の必要はなかったし、仮設住宅も郊外に多く設置され、住居に対する不足という感はありません。

ただ、寄り添って生きていた地域の高齢者が仮設転居により、コミュニケーション不足から孤独死に至った事例は多く確認されています。

10月18日 岩手県山田町で79歳の女性の孤独死が確認されました。

岩手県では2人目と言うことです。

阪神での教訓を生かし、雪に閉ざされる季節にこそ、見守りが重要になってきます。

○瓦礫の処分

被災地では瓦礫を仮置き場に山と積み上げていますが、その処分方法は定まっていません。

私が間違っていなければ、瓦礫の処分は自治体の仕事であり、国の関与すべき物でないとの見解があったように思います。

震災のように予想できない瓦礫の発生には、特例としてもっと国が関与しなければなりません。

今回の震災による瓦礫は、23,000万トンと報道されています。

ある被災地の自治体では、この瓦礫は通常の50年分であると言われていました。

被災地のみでは対応できません。

全国の自治体で処分の肩代わりを検討するも、これまた心無い抗議により断念する自治体が多く存在します。

その中で、東京都は貨物列車のコンテナを利用してこの瓦礫の受入を始めました。

11月10日には焼却灰40トンの最終処分を行ないましたが、都に抗議の声が上がっています。

石原都知事は会見でこの意見を一蹴しています、なんと頼もしいことでしょう。

復興には瓦礫の処分を避けて通れません。

もっと多くの自治体で受入を行い、石原都知事のように頼もしい首長が多く現れることを期待します。

	阪神淡路大震災	東日本大震災	
発生日	1995. 1. 17	2011. 3. 11	
発生時間	AM5:46:52	PM2:46	
震源(震央)	淡路島北部沖 明石海峡	三陸沖	
北緯	北緯34度35.9分	38度19分19秒	
東経	東経135度2.1分	142度22分8秒	
震源の深さ	16Km	24Km	
マグニチュード	7.3	9	
最大震度	淡路島で震度7	宮城県栗原市で 震度7	
地震の種類	直下型	海溝型地震 逆断層型	
被害	建物の崩壊 火災	建物の崩壊 津波 原子力発電所の 事故被害	
死者 ①	6,434	11,362	2011. 3. 30 現在
行方不明者 ②	3	16,290	〃
負傷者 ③	43,792	2,872	〃
①~③の合計	50,229	30,524	〃
避難人数 (ピーク時)	316,678	366,000	〃

* インターネット「常識ぽてち」より転用

第5章 震災による悲劇

今回の震災の犠牲者は阪神淡路大震災のそれを凌いでいます。

昨日まで隣で寝息を立てていた人が居なくなる、さっきまで雑談をしていた友人が居なくなる。受け入れ難い悲劇というものはそういうものなのかも知れませんが、東北震災にも多くの悲劇が有りました。

○防災無線で避難を叫び続け、帰らぬ人となった遠藤未希さん(宮城県本吉郡南三陸町)

新婚の24歳の未希さん、南三陸町防災対策庁舎で住民に避難を叫び続けました。

その後、遺体が確認されました。防災対策庁舎は町役場より更に海に近く位置し、津波により鉄骨の骨組みに瓦礫を残しています。

この庁舎では未希さん以外にも多くの職員が犠牲となっています。

未希さんの「希」はきっとご両親が娘さんに希望を持って名付けられたのでしょう。

未希さん! 天空の希望の星となり、南三陸町の、東北の復興を見守っていて下さい。

○多くの児童が犠牲となった大川小学校(宮城県石巻市)

大川小学校は海に近く、海拔0メートルの地域だったと思います。

津波からの避難が遅れ、68人の児童が犠牲となりました。

狩野愛さん、12歳で三人姉妹の末っ子です。

5人の家族で愛さんだけが欠けてしまいました。

両親は来る日も来る日も、寸暇を惜しんで愛さんを探し続けます。

沼地となった学校に入り、棒で泥の下を探る。多くの父兄も同じです

ある父親は重機を持ち出し、こどもたちを探し続けます。

これに呼応したのか、ある母親は重機の免許を取得し、これに加わります。

助かった児童の父兄も遺体が確認された児童の父兄もこの作業に関ります。

「人も重機も減る中で、共に苦しみ、支えあった仲間です。」と言われます。

愛さんは4月22日の自らの誕生日を過ぎても姿を現してくれません。

諦めかけていた4月28日、小学校で合同慰霊祭が開催されました。

慰霊祭を終えて帰宅の車中に連絡が有りました。

服装と足につけていたミサंगाが愛さんを物語っています。小さなご遺体です。

狩野さん一家にとっては愛さんの発見は一つの通過点でしょう。

ある意味大きな通過点をクリアでき、残された家族4人の震災からの復興はスタートします。

○津波からの避難の途中で祖母を失った娘さん

5月28日 読売新聞の「人生案内」に女子大生の文章が載りました。

祖母と二人で避難していましたが、このままでは二人とも死んでしまうと思った祖母は言いました。

「先に逃げなさい。」その結果、祖母はご遺体となって確認されました。

このことに娘さんは「祖母をおき逃げた自分を呪う」、自責の念で過ごしています。

6月2日 このお話を聞かれた方がお気持ちを寄せています。

81歳の女性です。

「私が貴方のおばあ様であったら、同じことを言うでしょう。

未来のあるお孫さんを道連れにはできません。娘さんが助かったことで満足して

死を受け入れたと思います。おばあ様に助けられた命を大切にしてください。

未来に向かって生きて下さい。それがおばあ様の願いであり、おばあ様に対する供養です。」

47歳の主婦

「震災が遠い存在になりつつありました。苦しみを直ぐ隣に戻してくれた気がします。

娘さんはきっとやさしい人でおばあ様の希望だったのでしょう。

おばあ様から受け継いだ命を大切に、悲しみが癒されることをお祈りします。」

仏教学者・作家で“ひろ さちや”さんがおられます。

ひろさんの「般若心経」という本のなかで、こういうくだりがあります。

母親と奥さんが池でおぼれていたら、どちらを優先して助けますか？

奥さんは若いから体力もあるので、母親から助けます。

余命を考えると、奥さんを優先して助けます…

仏様ならこうなさるでしょう、近い方から助けます。

とんち話のようですが、助かる可能性の大きいほうを優先するということです。

ですから、おばあ様の選択、娘さんのほうが足が速く、津波から避難できる、

助かる可能性は大きいとの判断は正しく、仏様もそうさったでしょう。

医療には“トリアージ”という言葉があります。

患者さんの病態を判断し、緊急の度合い付けをし、効率の良い医療をする手段です。

例えば、出血はしているものの応急処置のみで対応できる、縫合するまで充分待てます、直ぐに止血をしないと失血のために生命をなくします。

どちらを優先します。

緊急性の高い患者さんが多くいるときに、心臓もとまっている、呼吸もしていない、蘇生の可能性はないと判断される患者さんに多くの医師を投入できません。

ご家族には申し訳ありませんが、緊急性、治療の必要性を勘案して優先順を決めて対応をします。

これも仏様の助かる可能性の大を優先するお考えと相反しないものと思います。

母を失った、娘を失った……

多くの悲劇があります。

復興は大切なことです。

しかし、震災で犠牲となられた方々の鎮魂無くしての復興はありえません。

鎮魂の思いを胸に刻み、ともに東北の復興を、日本の復興を！

第6章 政治に思うこと

政権担当経験の乏しい民主党政権にとって、度重なる失態を繰り返している現状において、今回の震災は重くのしかかっています。

なりふり構わず、野党に協力を求めるべきであります。

野党においても、この国難に際して自党の権利云々等とほざくべきではありません。

与野党で震災復興内閣を組織し、目標を一とし全力で復興に対応すべきです。

きれいな作業服を着て、汚す事無く帰還する、これに多くの現地職員等が対応しています。復興の妨げです。

11月12日かな？細野原発担当大臣が被災地で除線作業に汗を流したとの報道がありました。確かに、見える形での行動も大切です。

ですが、人知れず行動することで本当の現実を直視できると思います。

貴方たちは隠密裏に被災地入りし、汗を流して活動し、被災民の生の声を聞いて下さい。行なっている議員さんがいたなら、ご免なさい。

国会議員の歳費の削減策は震災後半年でなくなっています。

総理大臣等の報酬削減は代替策か、実施されました。焼け石に水です。

復興を増税で対応しようという、安易な考えは捨てて下さい。

歳入を上回る歳出を続けてきており、いざという時に使える予算がない！

単年度会計と言って毎年、使い切る。

国際貢献と言って借金をしてまでも、国際機関の運営負担金を拠出する。

確かに、米国に次ぐ経済大国でしたが中国に抜かれて3位に転落。

韓国の追い上げに恐怖を抱いている現状です。

大戦の責任は、三世代を経過する現在でも背負わないといけないのですか。

中国は経済成長を遂げていますし、軍事費の伸びは目を見張るものがあります。

東南アジア諸国についても、補償に頼らず、経済支援も着々と進んでいます。

大戦は迷惑を掛けただけでは終わっていません。

植民地であった多くの国が大戦を機に、独立戦争を経て独立を勝ち得ています。

この独立戦争に多くの日本軍の残兵が貢献しています。

大戦の償いを見直す時期は既に経過しています。

戦後の経済発展は日本人の勤勉さがもたらしたものです。

裕福になり、外国の言うがままとなり勤勉を捨てたことが墮落の第一歩です。

国民も将来を考えず、今を楽しく過ごす風潮が蔓延しています。

この結果、不景気となり失業→生活保護との安易な図式が出来上がっています。

生活保護にしてももっと厳密に対応し、保護費の削減を考えないといけません。
保護の対象者でも、一体の作業ができる方については、外国に流れる仕事で対応可能なものを
安価で請負い、生活に不足分を補助することを考えて下さい。徹底して下さい。
就労意欲の創造と仕事を確保することにより、保護世帯の減少、保護費の減少が図れます。

また、不正受給者を排除して下さい。

大声で恫喝すれば保護してもらえとかも知ってこえます。

警察と情報交換や協力体制を強化して下さい。

全ての方とは言いませんが、福祉担当者はデスクだけで仕事する事無く、外に出てよく調査し
て下さい。

血税が本当に必要な人のために使われているか、遅まきながら検証して下さい。

震災というピンチにこそ、日本復興のチャンスと受け止めて下さい。

勤勉であった昔に立ち戻り、今こそ強い国家を打ち立てるべきです。

その先頭に立つ真のリーダーが現れて欲しいと切望します。

第7章 ボランティアとは何か

ボランティアとは何か？

端的に言えば、被支援者に対して、その欲する活動が無償で行なうこと。

- ・無理をせず、自分にできることをする。
- ・自分の活動に対して、相手に強要してはいけません。
- ・「～してあげる」の精神はいけません。
- ・活動に対して、その対価を求めてはいけません。(奉仕精神)
- ・活動に要する自分のことは、自分で処理します。(自己完結)

○ボランティア活動は記念ではない！

活動で被災地に赴いた際、観光名所をバックに写真を撮る。

許し難い行為です。

被災された方のお気持ちを慮って下さい。

報道機関による写真撮影は当然であり、活動家の資料等に利用目的は致し方ないでしょう。

しかし、興味本位での撮影は断じてなりません。

震災直後、多くの野次馬が土足で被災地、被災者に向けてシャッターを押したと聞きます。

この規制のために警察官やボランティアが対応しました。

恥ずかしいことです。

私は阪神淡路大震災時、淡路島の北端に位置する国立病院に勤務していました。

厚生労働省の現地本部長のK審議官が、淡路島の視察を行なうので対応して欲しいとの連絡があり、岩屋港に病院車を手配しました。

高速船から降りてきたK審議官が一番にしたこと、それは明石海峡大橋をバックに随行者にシャッターを押させたのです。

当然のことながら怒り心頭です。さすがにサラリーマンなので直接の抗議はできず、この後の随行は、官用車の運転手任せにし、そのお世話を放棄しました。

K審議官は後に、局長となり退官されましたが、人間として最低なことは間違いありません。

K審議官に対して、A国立病院部長(薬務局長となりましたが、自分の責任でない「薬害エイズ」事件の責任をとって退官されました)は、「食事等の気遣いは無用で、目的は被災された職員のお見舞いと震災対応に追われている職員の慰労です。」とってくれました。

本当に病院に来られても低姿勢で、しっかりと職員をねぎらって下さいました。

世の中は不条理ですね。

私は9月の南三陸町支援では、被災状況の写真は撮りませんでした。

撮るべきでないと思っていました。

神戸の皆さんから頂いた提供物資やボランティアセンター周辺の関連施設のみにシャッターを押しました。

10月の山元町では、写真撮影について悩みました。

常磐線の駅舎は廃屋となり、線路には草が生い茂り、架線は垂れ下がっています。

坂元駅の周りには建物が1軒も存在しません。

津波が襲った家屋、かろうじて倒壊、流出は免れたものの、1階部分は瓦礫の山と化す。

震災直後の惨状ではないにしても、平穏な生活を奪い去った震災を垣間見るには充分です。

自分の脳裏に刻まれても時とともに薄れるだろう、多くの人に惨状を知ってもらおうとの気持ちでシャッターを押しました。

被災の写真は興味で撮ったわけではありません。

被災の惨状を知っていただき、復興支援の呼び掛けに使うことをお約束します。

震災の悲惨さを「すごい!」と言う人がいます。

誤っています。「ひどい!」と表現して下さい。

○無理のない支援を

無理をしない、負担に思わない支援が長期にわたる支援につながります。

また、自らのおごりを生まない手段でもあります。

負担になればそこで終わってしまいます。

負担に思わない程度で行なうこと、それが大切です。

仏法で「いい加減」とは、チャランポランな状態を指す言葉ではありません。

「ちょうど良い加減」であり、適切な程度を表しています。

自分にとって負担に思うことをすれば、してあげているというおごりに代わります。

いい加減な程度での支援をお願いします。

本章の冒頭に「ボランティアとは何か」を説明しています。

奉仕の精神や自己完結を行なうためにも必要不可欠と考えて下さい。

○鎮魂なくしての復興はありえない!

今日の繁栄を築いた方、将来の夢を持った青年、子供たちの命を奪った震災です。

悲しみに打ちひしがれているだけでは、将来はなく、犠牲になられた人々に申し訳がたちません。

将来に向けた復興活動は当然、全力を傾けて行なうべきものと考えます。

しかし、震災の影でなくなった人の悲しみを胸に刻み、なにくそと立ち向かう姿勢は大切です。

南三陸町にはお彼岸にあわせて、花木農家から無償提供を受けた菊の花を

持って行きました。

犠牲者家族に使って頂くのとボランティアに参加されている方の献花用にと考えました。

ところがボランティアセンタースタッフに確認しても、「ボランティアに参加される人で献花される方はいません。」と平然とした答えが返ってきました。

予想しなかった答えです。

被災現場での活動においても、目礼や黙禱の行為はありません。
なんと悲しいことでしょう。

このことはやはり山元町でも同じです。

花の提供はしませんでした。目礼や黙禱の行為は確認されません。

被災地では悲しい出来事、犠牲者に触れて欲しくないのでしょうか。

阪神淡路大震災に遭いながら、家族や知人に犠牲者のいなかった私とは考えが違うのでしょうか。

鎮魂なくして、復興ありきの姿勢には納得できません。

犠牲者家族の気持ちを押し測って頂きたいと思います。

○「がんばろう」の呼びかけ

チェルノブイリ原発事故で医療活動をされた鎌田 實先生がおられます。

今回の東北震災でもご活躍されています。

現在、諏訪中央病院名誉院長の職にあられます。

鎌田先生のエピソードです。

病室回診時に患者さんに「がんばろう」と声を掛けました。

するとその患者さんは涙を流してこう言いました。

「これ以上何をがんばったらいいのですか」

「がんばろう」と言う言葉は、がんばっている人にとっていたわりの、励ましの言葉ではないのです。

以後、先生のキャッチフレーズは「がんばらない」となりました。

今回の震災でも「がんばろう」は多く使われています。

使う人には悪気があってのことではありません。

ですから、私は特に異議を唱えたりはしません。

しかし、私自身は常に「ともに復興を!」と叫んでいます。

○自分のできる活動を理解、把握し、節度を持つての参加と適切な時期の判断を。

自分にできる活動を知ることにより、現地での効率の良いボランティア活動を行なうことができます。

震災直後に医療やレスキューのできない人間が大挙押しかけたらどうなります。

必要な人間が被災現場に辿り着くのに支障を来します。その分、救難が遅れることとなります。

また、被災地でも余分な動きや物資を消費し、混乱を来すことでしょう。

自分にできることとその時期を読んでください。

自分で判断できないときは、各方面に情報を求めて下さい。

必要と思われる時は、節度を持って押し掛けて下さい。

情報を待っていては遅い場合もあります。的確な時期でないと判断されれば、

少し距離を置いて待機して下さい。

○「美德は秘するべし」の日本人の姿勢

少し意味が異なるかも知れませんが、湾岸戦争の時に戦費の負担はするものの、人的貢献をしない日本に向かってアメリカがこう言っています、「Show the flag!」
お金だけでは貢献は目に見えないぞ!

日本人は美德を隠したがる傾向にあります。そして、この行為を称賛します。
義捐金のようにひっそりと貢献する方法もあります。べつに否定しているわけではありません。
私は東北支援に際し、周りに支援物資の提供を呼び掛けました。

自分は良いことをするのだ、評価して下さいと言っているではありません。
声を出すことにより提供を申し出て頂ける、東北の人に物資の提供ができるわけです。
私一人の力なんて高々、知れています。よって、皆さんに協力をお願いするわけです。
また、私は東北支援に出掛け、このレポートを作成、多くの人に読んで頂きたいと思っ
ています。

これもまた、私はボランティアをしています、偉いでしょうと自慢したり、ほめて頂きたいと思
ってしているわけではありません。

声を出し、支援を見て頂くことにより、ボランティアのことを多くの人に知ってもらい、
支援の輪が広がることを期待しての手段と考えています。

○ボランティア活動で言う「自己完結」について

本章の冒頭でも触れています。

ボランティア活動を行なう人は、自分の食事、宿泊は自らで確保し、被災地の方に迷惑を
掛けないことです。

「自己完結」をはき違えている人がいます。

私は2度の東北支援に際して、物資の提供を周りにお願ひしました。

勤務先、出入業者、関連団体、元市議、現職県議、自身の所属団体、同窓会……

無理のない支援が継続となります…と前述しています。

サラリーマンの私にとって燃料費、宿泊費と食費等の雑費を負担し、提供物資まで自前で
そろえると、かなりの負担となります。

「自己完結」は被災地に対してであり、活動支援を呼び掛けるのはこれに反しません。
活動資金の提供を申し出てくれた方も居られます。

でも、もったいなくて、頂いた活動資金は被災地に義捐金として提供しました。

寒い季節は冬眠し、春の雪解けには再々度、東北の大地に立ちたいと考えています。
また、そのときには周りの方々に支援をお願いします。
私の考える「自己完結」はこのようなものです。

○ボランティア活動の内容とその形態

多くの義捐金をした人は偉いのか？ 被災地に出掛けて支援を行なった人は偉いのか？
大切なのは被災地を思う心であり、偉いのはその心を持った人です。
距離的に無理なく被災地に出掛けることができる、
サラリーマンではボランティア休暇制度があり、活動期間の給料は確保できる、
大学が組織的に支援、バスを仕立てる、活動に単位を付与する、
遠くではその費用、時間が多大となります。
日給月給で生計をなしている人は、その間の収入は確保されません。
活動参加の可能な環境が各自によって異なっているのです。
ちなみに私の場合は、ボランティア休暇もあり、有給休暇も消化し切れなほどありました。
こどもも成人しており、自分がこうしようと思えば束縛される要因が少ない環境でありました。

各自にできることをする、これがボランティアです。

大学生が避難所で足湯のボランティアをしました。
足をマッサージされることにより、被災者は人とつながっていることを実感します。
そして、震災の話をするにより胸のつかえから開放されるのです。
話しを聞きながら一緒に涙を流す、立派なボランティアじゃないですか！

学生はしっかりと勉強、クラブ活動をする。
震災で落ち込む事無く、しっかりと日常の生活をすればよいのです。
その中で、被災地の野菜等を意識的に購入する、立派なボランティアです。
力士は相撲を取ること、野球選手は野球をすること、歌手は歌うこと……
みんな自分にできることをすればよいのです。
日本に元気がないと東北の復興はありえません。
各自が自分にできることをしっかりと行なうことが、復興支援の原点です。

ここで感動をご紹介します。

皆さんもご存知でしょう「EXILE」

彼らも震災復興支援チャリティーソング「Rising Sun」を歌って支援しています。

10月2日 宮城県南三陸町で復興支援コンサートを行なってくれました。

TV番組「EXILE魂」で放映されていたので、多くの方はご存知でしょう。

ボーカルのATSUSHI、普通に見ればサングラスの切れたお兄さんです。

彼のサングラスから流れる涙を見ました、感動と感謝以外に言葉はありません。
彼らはきっと、自分にできることを精一杯し、多くの人に希望と勇気を与えてくれたに違い
ありません。

「陽はまたのぼってゆく、夜明けはそばにきている」

「どんな暗い闇の中でも 明けない夜はないと信じて 未来のために何かを感じている」

歌詞もしかり、彼らのパフォーマンスは最高のエールです！

ボランティアは義務ではありません。

しなくても勿論、かまいません。

でも、震災で犠牲となった人を、遺族をそして被災された人のことを思ってください。

そして、無理をしなくていいです、自分にできることを考え、行なって下さい。

小さな行いが集まって、大きな支援になります。

東北の未来のために！

第8章 ボランティア活動参加準備について

ボランティア活動には様々な形態が有ります。

ここでは被災地に出かけて、ボランティア活動を行なおうと思っている方に、その方法等をお話ししたいと思います。

これを書いている11月は、震災後8ヶ月を経過しています。

震災から被災地に駆けつける人は、震災後の活動過程によって異なってきます。

以下、震災から復興、生活再建の過程を説明します。

①震災直後 医療関係者や瓦礫等から救出を目的とするレスキュー関係者が現地入りします。

もちろん、瓦礫の下敷き者の救出、行方不明者の捜索に重機等の登場も欠かせません。

②避難所の運営 被災民が避難所で生活するのを支援する人が必要になります。

また、救援物資の受入、整理、配布等の避難所の運営には欠かせません。

③復興に向けたまず、瓦礫の撤去関係者必要となります。

また、避難所ではメンタル面でのサポートや感染症の管理が必要となってきます。

必然的に医療等も震災当初の外科系の災害医療から感染管理、

精神・心療内科的なニーズに変更します。

④ここからが色々な人たちと多くの一般人の登場です。

専門知識や技術を持つ人はもちろん、そうでない多くの人の登場です。

ある程度、重機等により整理された現場の瓦礫を更に分別するのに大量の人を要します。

また、建物は存在するも建物の中に瓦礫等が流入している、瓦礫を搬出・撤去しリフォーム前の状態に仕上げていきます。

その他、住宅周りの瓦礫の撤去や土砂で埋もれた側溝を整備します。

重機の方もすごいですが、人が集まればこれまた、すごい力となります。

⑤避難所生活から仮設住宅への生活が変わってきます。

仮設住宅への引越しや慣れない仮設住宅での生活支援を行ないます。

避難所で被災民が集まっていれば、情報提供や生活物資の提供も漏れなく

行なうことができます。しかし、仮設住宅に移ることにより、漏れが生じてきます。

また、身体の観察についても見落とすことが多くなってきます。

よって、仮設住宅の頻繁な巡回が必要となり、生活支援員、保健士等の登場です。

⑥仮設住宅から恒久住宅への引越しとなります。

引越しボランティアの登場です。

特に専門的な知識はなくても結構です。

引越しにはある程度の要領はありますが、手作りの引越しも良いと思います。

⑦恒久住宅に引越ししても見守り等は欠かせません。

仮設住宅はある程度集まっていますが、恒久住宅はそうとは限りません。

ある意味、フットワークが求められます。

新しい土地に慣れる、近所とのコミュニケーションが取れるような配慮が必要となります。

このように時期によってその活動内容は異なってきます。

上記が全てではありませんが、大まかに説明しました。

ボランティア活動に参加しようと思われる方は、自分が何をできるかよく判断して決めて下さい。

復興の進捗や現地のニーズはインターネット等で確認することができます。

また、被災地のボランティアセンターではボランティア活動に参加される方と現地ニーズのコーディネートも行なっています。

被災地ボランティアセンターに相談するのも手段です。

ただ、進捗の状態によりボランティアの受入制限を行なう場合も有りますので、被災地のボランティアセンターの発信情報を十分に確認して下さい。

○ボランティア保険

活動が決まりましたら、ボランティア保険に加入することをお勧めします。

民間損保保険会社でも取扱はあろうと思いますが、市町村の社会福祉協議会で加入できます。

ボランティア活動中の怪我等の補償を受けることができます。

補償の内容については、社会福祉協議会にて確認をお願いします。

保険期間は1会計年度となっているようです。

保険金は300円と少額で済みます。

○ボランティア登録

ボランティア活動の受入は、NPO や NGO でも行なっています。

しかし、NPO や NGO の全てがそうであるとは言いませんが、被災された方に報酬を求めている例もあります。

ボランティア活動は対価を求めないものと思っています。

報酬の請求はボランティアではありません。

私の場合は被災地のボランティアセンターに照会し、ボランティア登録を行なって活動しました。

また、ボランティア車両(後で説明します)の登録に、公の機関の証明を求められますので、ボランティアセンターでの事前登録をお勧めします。

もちろん、飛び込みでのボランティア登録も場所、時期によっては可能ですが、事前登録をお勧めします。

○ボランティア車両の申請、登録

活動内容、時期、活動先が決まりましたら、現地に行く手段を考えます。

時期にもよりますが、被災地での公共機関が乱れていることも考慮しなければなりません。

やはり、車での移動等が無難でしょう。

車を使う場合、有料道路、高速道路の料金については、ボランティア車両の申請をすれば、必要な期間、区間に応じてボランティア車両証明書が発行されます。

住居地から出発するのであれば、居住地の市町村にて申請して下さい。

その際には、使用する車の車検証やボランティア登録証の提出が求められます。

車が定まっていないとか、ボランティア登録証の発行しないボランティアセンターもありますので詳しくは市町村の窓口でお尋ね下さい。

遠方からの参加であれば新幹線、飛行機で空港等に到着、レンタカーを手配しての移動という手段もあります。

この場合のボランティア車両の登録は、被災県の県庁で行なうと思います。ご確認ください。

○お手軽なボランティア活動参加手段

もっとお手軽にボランティア活動に参加する方法もあります。

市町村が仕立てるボランティアバスに乗ることです。

ボランティア先、活動内容の設定も行なわれており、行程により宿泊場所も確保されています。

また、ツーリストもボランティア活動ツアーと称してパックを販売しています。

それぞれの内容や費用を確認して、検討してみてください。

○持ち物等

活動先、活動内容、現地の復興状況により、持ち物は変わってきます。

ボランティア活動は自己完結で行ないます。

震災直後の混乱期は、自分の宿泊手段、食料等は全て自分で行なうことを原則とします。

そのため、車中泊やテント泊での参加を考慮します。

ボランティアが集まって、生活環境を共有する場合があります。

ある程度、落ち着いた時期には車中泊やテント泊を制限する市町村が現れてきます。

そうなれば、自分でホテル等の宿泊先を確保しての参加となります。

食料も現地での調達が可能となってきます。

要するに、被災地に対して宿泊施設や食料の負担を求めないようにするのがです。

持ち物ですが、瓦礫の撤去活動を行なうことを例にして見ます。

作業服や長靴(できれば底の厚い物やしっかりした物、釘を踏むこともあるので)は勿論、手袋(軍手、ゴム手袋、革手袋..)、マスク(しっかり防塵の可能な物)や活動の内容により熊手、移植こて、カッターナイフ等が必要になってきます。

スコップやバケツ等については、ボランティアセンターが確保していますので持参する必要はありません。

活動が特殊な器材を要するのであれば、現地ボランティアセンターと調整を行なって下さい。

○物資の提供

震災からの復旧の過程により必要な物資は異なってきます。

震災直後では医薬品、医療材料は山ほど必要でしょう。

しかし、このような特殊な物資については関係機関からの提供を受けます。

一般のボランティアとしては、衣料や食料品等の生活必需品が最適と考えます。

送る場合は、現地で整理しやすいように箱に物資の種類やサイズ等を明確に表示する等の工夫を要します。

復興作業では、マスク、手袋等の消耗品やスコップのような耐久用品も喜ばれます。

瓦礫の搬出には土嚢袋を大量に使用します。

ボランティアセンターや、その後を引き継ぐ社会福祉協議会に確認されるのが最良でしょう。

提供の手段や予算により考慮して下さい。

あくまで無理をしない程度で構いません。

ボランティアに関する現地の情報、準備に関するサポート等については、
社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会 ひょうごボランティアプラザにて行なってくれます。

ひょうごボランティアプラザ

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町 1-1-3

神戸クリスタルタワー 6階

* JR 神戸駅東に徒歩 5分

TEL 078-360-8845 FAX078-360-8848

第9章 ボランティアセンターに望むこと

今回の東北支援では2町のボランティアセンターと関りを持ちました。
電話等でも色々なボランティアセンターとお話をしました。
また、兵庫県、神戸市等関係機関より提供された情報等を勘案、考察し
苦言を呈したいと思います。
全てのボランティアセンターがそうであるは思っていないですが、以下お読み下さい。

ボランティアセンターは市町村の社会福祉協議会の職員が中心となって構成されています。
東北では海岸部の多くの市町村職員が、震災の犠牲となりました。
内陸部では比較的被害も少なく、その復興作業には余力を呈しています。
このような状況で、ボランティアセンターは地元の少ない社会福祉協議会の職員と
近隣市町村の応援職員に社会福祉法人、地元の被災民等が加わり構成されているようです。
社会福祉協議会の職員は実践は初めてなれど、その運営に関する教育、研修は
受けていると聞きます。
運営の根幹はあるものの、社会福祉法人や地元被災民等はその知識はなく、
よって組織としての情報共有や指揮、命令系統が整備されていないのではと実感しています。

実際には物資の提供について、事前の情報提供はしているものの、当日にはスムーズに
受渡しができなかったことが証明しています。

また、ボランティア活動に参加する人にも色々な背景を背負った人がいます。
病後で頭を使うことはできるが、身体がついてこない
年を召して少々足腰に自信がない、されどじっとしてはいられない…
こういった参加者にボランティアセンタースタッフの言った言葉は許せません。
「活動のえり好みをする人は来ないで下さい」
尊いお気持ちで参加された方に対して人間性を疑う、ひどい言葉だと思いませんか！
震災直後の混乱期ならまだしも、少々耳を疑う発言です。

冬に向けての物資の提供がネットで呼び掛けられています。
被災民や復興に必要な物品はもとより、ボランティアセンタースタッフの越冬物資の
提供が呼び掛けられています。
本末転倒なのではないですか。

ボランティアセンターではスタッフ間の情報共有、指揮命令系統の整備を行なって下さい。
そして、貴方たちが最初に持っていた尊い気持ちを思い出してください。
被災民のために、東北の復興のために汗を流そうとしたことを。

私が思ったこと、感じたことがボランティアセンタースタッフを傷つけたのなら謝罪します。
しかし、現実問題として見た、聞いた、感じたことなのです。
仏法用語に「脚下照顧」言う言葉があります。
足元を見なさい、現状をよく省みなさい…と教えています。
考える余裕もなく、走ってきたと思います。
だから、今、この機会に自分たちの現状を見つめて下さい。
何か思うことはありませんか？

ボランティアセンターは現地のニーズとボランティア参加者とをコーディネートします。
震災復興はこれから災害支援から生活支援にウェイトを移し変えてきます。
しっかりとコーディネートをされることで復興は進みます。
一日も早い復興のために、引き続いて貴方たちの力は必要です。
切にお願いします。

最終章 説法臭いお話しをします

最後に説法臭いお話しをします。

「第3章 ボランティア活動で出会った人たち」でお話をした明らかにその筋の人たちのことです。

胸に「報国」とプリントされたTシャツをそろえて参加していました。

中国 宋の岳飛という人は大変な忠誠心の持ち主で、「尽忠報国」の四文字を背中に刺青にしていたそうです。

「尽忠」は国家、君主に忠義、忠誠を尽くすことであり、「報国」は国家のために力を尽くしてその恩に報いることを表します。

国家を社会と考えると如何でしょう。

社会に対して忠節を尽くし、全力で活動する…

素晴らしいことだと思いませんか。

『論語』に「見義不為、無勇也」の段落があります。

日本では「義を見てせざるは勇なき也」といわれています。

人としてなすべきことを知りながら、それを実行しないのは勇気がないからである。

「義」を「難儀」と受け止めても良いと思います。

「難儀」は東北震災と考えると下さい。

自分にできることでいいです、ちょっと志を持って行なってみませんか。

ボランティアの考え方には温度差があります。

でも、人を思うことが大切であり、これがボランティアの第一歩です。

人との繋がり 「絆」を大切に思います。

どこでご紹介しようかと考えていましたが、とうとう最終章になってしまいました。

11月22日 読売新聞の記事です。

仙台市にお住まいで、重度の障害をお持ちの詩人・大越 桂さん(22歳)のお話しです。

お母様が介護をされており、お母様の手のひらを指でなぞり、筆談で詩をお作りになっています。

震災では停電により人工呼吸器が使えず、車より電気を引きました。

震災後につくった「小さな種だって大きな花になる。」の結びです。

〈花をつなげたかんむりを あなたにそっとのせましょう

今は泣いてるあなたでも 笑顔の花になるように〉

「私にできる事をしよう」復興へと歩み始めた人たちへのエールです。

稚拙でまとまりのない文章、構成ではありますが、とりあえず自分の思いつくままに綴りました。

誤字脱字はご容赦下さい。

また、かなりの主観も入っており、ご批判も多々あろうかと思えます。

しかし、このレポートを読んで頂き、少しでも東北復興に、また色々なボランティア活動に興味を持って下されば幸いです。

大いにディスカッションしたいと考えています。

どしどし、ご意見をお寄せ下さい。

そうすればボランティア気運も上昇し、東北の復興が少しでも早まるものと信じます。

そうなることを願って、筆をおきます。

震災の犠牲者に鎮魂を込めて。

平成 23 年 11 月

平 井 和 広

*新聞記事等については、無断で盗用しましたこと、お許し下さい。